

響によるものと思われ、さわめて興味深いものがある。

- ① 石窟の文献としては、常書鴻『敦煌壁面』。P. Pelliot『Le Grottes de Touen-houang』。水野、長広共著『龍門石窟の研究』。
- ② 高田修、上野照夫共著『インド美術』
- ③ 正藏三四卷。
- ④ 正藏二二卷。

## 元政上人著書の一考察

——特に伝記類について——

丹 治 智 義

高僧伝は仏教の盛衰消長を知る上に欠く事のできない資料の一つである。

日蓮宗に於けるかかる僧伝としては、六牙日潮の本化別頭仏祖統紀が、「該書の宗門史に貢献せるは、本朝高僧伝並に元亨釈書等の本邦仏教史上に於けるが如し」<sup>(1)</sup>とか、

「日潮は宗史学の上に不朽の業績を残した」等と言われて高く評価されている。確かに、広汎な資料を蒐集し、それを一定の組織に纏めた功績は実に大なるものである。

本稿では、日蓮宗関係の伝記数でこの別頭統紀には到底及ばないが、広く宗門内外にわたる僧伝を残した元政著述の伝記書について触れてみたい。

元政の伝記書としては、本朝法華伝、扶桑隱逸伝、龍華歷代師承伝があり、又、艸山集の中にも記載されている。

そこで、これらの著述について概観すると、本朝法華伝は法華経の弘伝に関する事項を記述したもので、發願、転読、持誦、講讀、書写、聴聞等十科に分ち、主として平安期迄の諸宗の僧九十四人を収録している。この書は、巻頭に「唐祥公法華伝行乎世也久矣本朝之伝吾不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而見之矣」<sup>(3)</sup>とあり、本邦に於ける法華伝が未だ著述されていない為に著わされたものである。

次に扶桑隱逸伝は文徳天皇の朝（A・D・八五〇～八五六）より大永年間（一一五二～一一五二八）に至る迄の隱遁僧七十五人についての行状を記したものである。これは元

政が、「余交山林二十有余年矣多病疎懶而学焉而未得也  
 與<sub>レ</sub>甥未<sub>レ</sub>得也巳<sub>二</sub>動輒將<sub>二</sub>自敗<sub>一</sub>矣」<sup>(4)</sup>と、生来蒲柳の身で隠  
 遁生活が充分にできないことを慚愧している。そこで隠遁  
 の人士を先哲と古聖に求めたのであろう。

又、龍華歴代師承伝は、元政の出家した京妙顯寺に於け  
 る開山日像より十三代興普日饒迄の歴代について記述した  
 ものである。この書を著述するに至った理由を、元政は日  
 像伝の伝末に、「盖当<sub>二</sub>天下喪乱之時<sub>一</sub>一家法宝多為<sub>二</sub>烏有<sub>一</sub>  
 也……今之伝文亦是兵燬之余耳余慨<sub>二</sub>斯散落<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>僭越之

罪<sub>一</sub>攢撫補綴才括<sub>二</sub>一化之始卒<sub>一</sub>」<sup>(5)</sup>と述べている。

艸山集は叙、書、記、伝、仏事、詩、文等十九種より成  
 り、元政自ら編輯したもので、このうち、宙之卷「伝」、  
 洪之卷「行状墓誌」、余之卷「文」に中興三師伝等十一人  
 の伝記、行状が記載されている。

以上のうちで、日蓮宗関係のものは、扶桑隠逸伝に二  
 人、龍華歴代師承伝に十三人、艸山集には行状を含む九人  
 と、二十四人の伝記、行状が記載されているにすぎない。  
 これらの伝記、行状名を示すと△第一表△の如くである。

△第一表△

書名	伝	逸伝	扶桑隠	名	龍華 歴代 師承伝
			日充		
		妙覚			
		日像菩薩			
		大覚大僧正			
		朗源僧都			
		日霽上人			
		日明僧正			
		日具僧正			
		日芳大僧正			
		日広上人			
		日教上人			
		日堯上人			
		日紹大僧都			

艸山集		日 衍 上 人	
[行状纂誌]		日 饒 上 人	
余之卷 [文]	深艸宝塔寺中興上人日銀伝	本満寺日重伝	
	京師立本寺日審上人行録	蓮水寺日乾伝	
洪之卷		本遠寺日遠伝	
[行状纂誌]		艸州原田法華寺日雄法師行状	
[行状纂誌]		艸州能野田日孟法師行状	
[行状纂誌]		知足庵日勝行状	
[行状纂誌]		艸山宜翁行状	

この日蓮宗関係の伝記名をみただけでも、扶桑隠逸伝、龍華歴代師承伝、艸山集の三書では、その著述態度に相違のあることが明らかである。

かように、元政の伝記類は四著書とも、法華、隠逸、歴代師承等と異った目的で著述され、且つ、これらを記述す

るに至った動機等も異っているのであるから、勿論、その著述方法等にも相違があり、内容にも長短精粗の差はあるが、これらの伝記を合せると、実に百九十三伝に達する。

これは我が国の高僧伝の代表ともいふべき、師蛮の本朝高僧伝、道契の続日本高僧伝、性敏の東国高僧伝等いずれも未だ著述されなかった時代に於いて、続日本高僧伝(二百三十八伝)にほぼ匹敵する程の高僧伝を著述したということができよう。

次に、これら元政の伝記類は日蓮宗関係の伝記書のうちで、如何なる意味をもつのであろうか。

そこで、日蓮宗に於ける伝記類の著書を概観すると、まず祖師伝については、元政が龍華歴代師承伝の叙に、「高祖応迹者既其広讃略伝相次而出且<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>臧<sub>二</sub>于此<sub>一</sub>矣」<sup>(6)</sup>とある如く古来より多く、元政以前に著述されたものは、八第二表Vに示すが如くであり、このうち、円明日澄の「日蓮聖人註画讃」、円智日性の「元祖蓮公薩埵略伝」は、印刷術の整備に伴い、既に、江戸時代の初期に出版され、流布していたのである。

△第二表△

伝 名	著 者 名	著 作 年 次	備 考
高祖一代行状記	佐渡阿闍梨日向		
大聖人御伝	大石寺日道		「三師御伝」首篇
元祖化導記	行学日朝	文明十年	
日蓮聖人註画讃	円明日澄	永正年間	
元祖蓮公薩埵略伝	円智日性	永録九年	
大聖人御一記	要賢日我		
本化伝灯大師録			玉沢妙法華寺所伝
元祖化導譜	寂照日乾		
元祖年譜	了玄日精		
妙法蓮華経日蓮記			

次に、高僧の伝記を収録した所謂高僧伝の類としては、元政以前の著述に、久遠成日親の「伝灯抄」、嵯岐日暗の「当門徒継図次第」、平賀本土寺継図次第、作者未詳の「日像門家分散之由來記」、<sup>(7)</sup>「当家諸門流継図之事」、

京都妙蓮寺学頭常住日澄の「妙蓮寺祖師記」<sup>(8)</sup>等がある。だが、その殆どが支那の四朝高僧伝、或いは本邦に於ける高僧伝に見られる所謂列伝体の形式で記したのではなく、

しかもこれらは宗学全書に記載されるまで、一度も出版されていなかったのである。

これに対して、元政の伝記類は△第三表▽に示すが如く  
 竜華歴代師承伝が著述後三年目の萬治元年に出版され、又  
 本朝法華伝は著述の翌年である寛文元年に、扶桑隠逸伝は  
 寛文四年と、この三書は元政在世中に既に出版されている。  
 最も遅い艸山集でも元政寂後六年目の延宝二年には出版  
 されており、いずれも流布していたものと思われる。

# △第三表▽

書名	著作年次	刊行年次
竜華歴代師承伝	明暦元年 (一六五五)	萬治元年 (一六五八)
本朝法華伝	萬治三年 (一六六〇)	寛文元年 (一六六一)
扶桑隠逸伝		寛文四年 (一六六四)
艸山集		延宝二年 (一六七四)

そこで、これより後の享保十五年(一七三〇)に著わされた別頭統紀をみると、日潮は既に述べた△第一表▽の二十四伝については、「艸山和尚紀事所謂竜華伝也」<sup>(9)</sup>、「艸山和尚委記行実」<sup>(10)</sup>説「艸山集」<sup>(10)</sup>、「艸山崇」之載「千隠逸伝」等と記しているが、その他の伝記については殆どその出処を明らかにしていない。これは元政寂後約六十年の日潮の別頭統紀作成当時<sup>(10)</sup>に於いても、尚、竜華歴代師承伝等の元政の著述以外には、何ら出版された伝記書がなかったことを示すものであろう。このことから、元政の伝記類が出版された当時、日蓮宗には、他に列伝体の伝記書は何も出版されていなかったといえよう。

以上をまとめてみると、

元政の伝記類は法華、隠逸、歴代師承等の性格上、或いは著述するに至った動機の違いから、著述方法や内容にはそれぞれ相違はあるが、すべてを合せると広く各宗の僧にわたり百九十三伝に達する。これは日本の代表的な高僧伝の一つで、元政より後に著わされた続日本高僧伝に匹敵する程の僧伝である。

又、このうち、日蓮宗関係のものは二十四伝とその数に於いて多くはなかった為、殆ど問題にされなかったが、日蓮関係の僧伝のうちで、列伝体の僧伝として出版されたものは、竜華歴代師承伝等元政の伝記書が最初であったといえよう。

(註)

- (1) 磯野本精著 日蓮宗史要 三頁
- (2) 執行海執著 日蓮宗教学史 二四七頁
- (3) 本朝法華伝 一丁
- (4) 清水龍山閣原文対照国訳扶桑隠逸伝二頁
- (5) 音馬夷藏訳 龍華歴代師承伝十三丁
- (6) 龍華歴代師承伝二丁
- (7) 「伝灯抄」より「当家諸門流繼図之事」迄は日蓮宗宗全書史伝旧記部(一)所収
- (8) 日蓮宗宗全書史伝旧記部(一)一八三頁以下
- (9) 日蓮宗全書本 三四六頁
- (10) 日蓮宗全書本 四一一頁
- (11) 日蓮宗全書本 四六八頁

## 『日蓮聖人の良源観』

牧 野 博 悠

こゝに日蓮聖人の良源観と題して、吾祖の態度を窮めるのに、祖伝中にその記述殆んど無に等しく、三箇所の抽象的記述がみられるのみである。そこから聖人の良源に対する吾祖の態度を求むるに無理はあろうが、少ない記述には聖人が良源に対して、それなりの考えがあったからであろうし、そこには聖人の関心及びとらえかたを示しているものと考えられる。それらを求むることによって自然と聖人の良源観が出てくると考える次第であり、それをこゝに述べんとするのである。

良源を伝える祖伝は先に述べたごとく、三箇所を数えるのみである。つまり、正元元年(一二五九・三八歳)伊豆流罪以前に法然の撰撰集を破して、念仏無間であるとした「守護国家論」、文永九年(一二七二・五一歳)佐渡一の谷にて四条金吾殿に不退の信仰を進めた「四条金吾殿御返